

令和 4 年 5 月 9 日現在

機関番号：37102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02879

研究課題名(和文) 教師が実施しやすいミニSSTの開発

研究課題名(英文) Development of "Brief SST" efficiently conducted by teachers

研究代表者

伊藤 弥生 (ITO, Yayoi)

九州産業大学・人間科学部・教授

研究者番号：00346743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：SST(ソーシャルスキルトレーニング)は、文部科学省の『生徒指導提要』において教育相談の新手法の一つとして取り上げられ、教員採用試験の出題が増加するなど、教育現場の重要取り組み課題となっている。しかし、現状ではソーシャルスキル教育に必要な複数回セッションに割く時間が厳しく、専門外のため教師自らの実施に不安が多く、実施される場合でも専門家任せが多い。そこで本研究では、学校における実施の現状と実施への不安・阻害要因の実態調査により問題点とニーズを洗い出した上で、技法習熟と実施の両面でコストが少ない、教師が実施しやすいシングルセッションのソーシャルスキル教育の開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した「教師が実施しやすいシングルセッションのソーシャルスキル教育」の提案により、教師によるソーシャルスキル教育実践が進み、自らクラスを変えられるという自己効力感が向上し燃え尽き防止につながることを期待される。

また、教師自身がその学級にフィットするソーシャルスキル教育プログラムを開発する契機にもなることも期待されよう。

研究成果の概要(英文)：SST (Social Skills Training) has been included as one of the new methods of educational consultation in the "Student Guidance Handbook" of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and has become an important issue to be addressed in the field of education, as it is increasingly included in teacher recruitment examinations. However, the current situation is that the time required for the multiple sessions necessary for social skills education is limited, and teachers are often anxious about implementing it themselves because it is outside their expertise, and even when it is implemented, it is often left to specialists. In this study, we conducted a survey of the current state of implementation in schools and identified problems and needs, and then developed a single-session social skills education program that is less costly in terms of both technique mastery and implementation, and easier for teachers to implement.

研究分野：臨床心理学

キーワード：教師 SST ソーシャルスキル教育 ブリーフセラピー 解決志向ブリーフセラピー

1. 研究開始当初の背景

学級内の仲間関係のトラブルをはじめ、いじめや不登校といった学校での様々な人間関係の問題の背景にはソーシャルスキル不足が存在しており、その解決法として心理教育の一つである Social Skills Training (以下 SST と表記) の検討が多くなされてきていた。

そうした成果を元に、文部科学省による『生徒指導提要』において SST は教育相談でも活用できる新たな手法として取り上げられた。しかし現状では、SST に必要な複数回セッションに割く時間の確保が困難であり、専門外であることから教師自身での実施に不安や疑問が多い。実施される場合でも専門家任せのことが多いが、クラスを自らの手で変えられることは教師の自己効力感に大きく関わり、ひいては燃え尽き防止にもつながると思われ、教師自身による実践が望まれる。

2. 研究の目的

学校における SST の成果を報告する論文は多いが、それらのほとんどは専門家がトレーナーとなって行い高い効果を得られた、いわば「理想的な成功例」である。それらの実現には、論文となった実践以前に専門家が経験してきた様々なトレーニングによる SST 技法の習熟が暗黙の前提となっている。そのため、教師がそれらの知見を基に学校で SST を実施しようとしても、そうした習熟がないため失敗したり、同じような効果を得られない。従来の SST 研究をそのまま生かすには、教師を対象に綿密な研修を行い専門家レベルの習熟を求めることになるが、慢性的な時間不足の現状を考えると明らかに非現実的である。

そのため本研究では、従来とは異なる、教師が体験しやすい失敗や不安に配慮した特別な習熟を得なくても出来るプログラムの開発を目指す。また本プログラムは習熟におけるコストに加えて実施においてもコストが少ないシングルセッションのプログラムを開発することとする。

本研究では、学校における「SST の実施の現状把握」と「SST 実施への不安・阻害要因の検討」を行い、その検討を踏まえて、多忙な学校現場で SST が得意でない教師でも実施しやすいシングルセッションのプログラムの開発を行う。

3. 研究の方法

以下の方法にて展開した。研究開始後新型コロナウイルス感染が拡大したが、本研究は実践研究センターのデザインであり、協力者へのリスクが危惧されたため、一年間研究期間を延長し安全に十分配慮の上実施した。なお研究の展開にともない SST という表現よりも、教育分野によりフィットする SSE (Social Skills Education) という表現が適切であるとの判断にいたり、第 2 段階以降の研究では SSE という表現を用いることとした。

第 1 段階	学校における SST の実態調査 対象：教員免許状更新講習受講者 内容：実施状況・実施への不安・阻害要因	学校における SST の問題点とニーズの把握	プログラム原案作成
第 2 段階	教師が実施しやすい SSE の開発 1 トレーナー：SSE 達意の研究分担者 参加者：教職学生 評価：参加者へのアンケート	参加者視点によるプログラムの適切性の検討	プログラム原案修正
第 3 段階	教師が実施しやすい SSE の開発 2 トレーナー：原案プログラム受講済み教職学生 参加者：教職学生 評価：トレーナーへのインタビュー	トレーナー視点によるプログラムのやりやすさの検討	研究終了

4. 研究成果

(1) 学校における SST の実態調査

本研究では、教師による SST の広範な実施に向けて、教師が SST に対してどのようなイメージを有するのかについて検討した。本研究は、SST に対するイメージ（以下 SST イメージ）と SST を自分で実施することに対するイメージ（以下 SST 実施イメージ）の個別での検討、SST イメージと SST 実施イメージの関連の検討、SST の経験の有無による SST イメージや SST 実施イメージの相違について、3つの視点で検討を行うことを目的とした。教師 160 名に質問紙調査を行った結果、SST イメージとして「有意義」、「個性否定」、「変化期待」、「個性発揮」の 4 因子、SST 実施イメージとしては、「意欲」、「職場での実施可能性」、「実施に対する自己効力感」、「技術習得」の 4 因子がみいだされた。SST イメージは勤務校での SST 実施経験の有無に関わらず全体的に良いイメージであった。一方、SST イメージの良さは、SST 実施への高い意欲にはつながりやすいが、技術習得や実施に対する自己効力感の高まりにはつながりにくいことなどが確認された。これらのことから、多忙な学校で教師が実施しやすい、準備・実施コストが低い SST の開発が期待される。

(2) 教師が実施しやすい SSE の開発 1

-参加者視点によるプログラムの適切性の検討

本研究では、教師が実施しやすい 1 回で行う SSE の開発を試みた。主要なブリーフセラピーである解決志向ブリーフセラピーに基づき、既に持っている自分なりの良いスキルの重視と、ソーシャルスキル磨きのきっかけ作りを狙いとする中高生用を作成し（ブリーフ SSE と命名）、実施可能性を実践により検討し内容を確定した。次に、参加者に質問紙調査を行い、ブリーフ SSE の、学校における SSE としての適切性と、上記の狙いを反映する可能性を検討した。なお、本研究は開発の第一段階として、大学生対象とし聞くスキルに焦点を当て予備的に行った。結果として、ブリーフ SSE は、ソーシャルスキルに関して一定程度理解させ、SSE に対する個性の否定的なイメージを減じ、SSE による変化期待を高めており、学校における SSE として適切となる可能性が示唆された。また、自分らしいスキルの強みに気づかせ、ソーシャルスキル学習に前向きにさせており、上記の狙いも反映する可能性が示唆された。今後は、中学生や高校生を対象に、聞くスキル以外のスキルも取り上げた本格的実践を行い、本研究で示唆された仮説を検証する方法も設定の上、妥当性を高めた調査を行い、学校側から評価を得た検討が期待される。

(3) 教師が実施しやすい SSE の開発 2

-トレーナー視点によるプログラムのやりやすさの検討

本研究では、教師が実施しやすい解決志向ブリーフセラピーを活用した SSE（ブリーフ SSE と命名）を、教職課程の学生がトレーナーと参加者となって行き、ユーザビリティの視点から検討することを目的に調査を行った。アンケートでは、参加者が示した予期的ユーザビリティ得点、トレーナーが示した実際のユーザビリティ得点ともに、5 点中 3 点以上の平均値であった。また、「意欲向上」と「職場での適合性」については、トレーナーが示した実際のユーザビリティの平均点が予期的評価より高く、教師が実施しやすいことを目指した本プログラムとして極めて重要な結果が得られた。インタビューでは、トレーナーに実際に行った場合のユーザビリティを尋ねた。その結果、プラスの評価については、アンケートから概ね良好と示された量的結果が質的に肉付けされた。今後、マイナスの評価と ± どちらとも言えない評価の精査のためにも、現場の教師の実践によるユーザビリティ評価が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 久木山健一・伊藤弥生・山口祐子	4. 巻 44-4
2. 論文標題 教師によるSST実施に関するイメージについての研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会誌	6. 最初と最後の頁 583-590
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤弥生・山口祐子・久木山健一	4. 巻 6（2）
2. 論文標題 教師が実施しやすい「ブリーフSSE」の開発-大学生を対象とする予備的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kukiyama Kenichi, Ito Yayoi, Yamaguchi Yuko
2. 発表標題 Factors improving teachers' self-efficacy for conducting SST -to improve work engagement of teachers'
3. 学会等名 XVI European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 祐子 (YAMAGUTI Yuko) (30753321)	帝塚山大学・心理学部・准教授 (34601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	久木山 健一 (KUKIYAMA Kenichi) (10387590)	九州産業大学・国際文化学部・教授 (37102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関